



関係からみた^{連載}子どものこころと育ち

小林 隆児 Kobayashi Ryuji 大正大学人間学部臨床心理学科教授

関係がしっくりこない母子

D男：初診時2歳11カ月，知的発達水準：中等度精神遅滞（推定）

主訴：ことばの遅れ，視線が合いにくい，関係がしっくりこない，自閉症ではないか。
家族構成：姉，兄，D男，両親の5人家族。近くに母方祖父母が住んでいて，毎日のように互いに行き来している。

生育歴：妊娠中，とくに異常なく，満期正常分娩。身体運動発達のマイルストーンにもとくに問題はなかった。しかし，1歳を過ぎてもことばが出ない。相手をしていても視線が合いにくいことがずっと気になっていた。母親が手をつないでいても，すぐに手を振り払ってどこかに行ってしまう，迷い子になることが少なくなかった。ほかの母親に相談すると自閉症ではないかと言われて心配になった。いまでもほとんど言葉らしいものは出していない。保育園に連れて行っても母子分離に対して平気な様子だという。最近，筆者のもとに祖母の勧めで相談にやってきた。

筆者が母親とのあいだで感じたこと

第1回：面接を始めると，母親は心配事を矢継ぎ早にどんどん話しかけてきた。心配が強いことが気になったので，筆者はゆっくりゆっくり一語一語噛み締めるように相槌を打ちながら応答するように心がけた。母親はこちらの応答を待つことが困難なほど先を急ぐため，筆者はしだいに自分から何かを話そうという意欲をそかれ，気持ちが萎えてしまう感じをもった。そこで筆者はそのことを次のように伝えた。「お母さんがどんどん先を急がれるので，こちらはどうか口を差し挟んだらよいか戸惑ってしまいますね」と。母親との面接のなかで筆者が感じたことをこのような形で投げ返してみたところ，母親は急に顔面を紅潮させながら何か気づいたかのようにして，一気呵成に以下の内容を語り始めた。

自分の思いどおりに子どもが行動してほしい

自分は子どもに対してなぜか待てないところがある。自分の望むように子どもに行動してほしいと思ってしまい，つい子どもに対して怒ることが多いというのである。上の娘はどこか繊細で，自分からはあまり話そうとしないが，一人でいろいろと考えているようだ。本を読むのが好きで，大人びたところがある。能力は高いと思うのに，学校から帰ってもすぐに宿題をやらない。やらなくてはいけないとわかっているのに，やろうとしない。いまやればすぐにできると思うのに，夜になって時間がなくなってからやろうとする。そんな姿を見ているといらいらす。2番目の息子は姉と弟の間に入って気を遣っている。母親からみるととてもできた子だ，というのである。

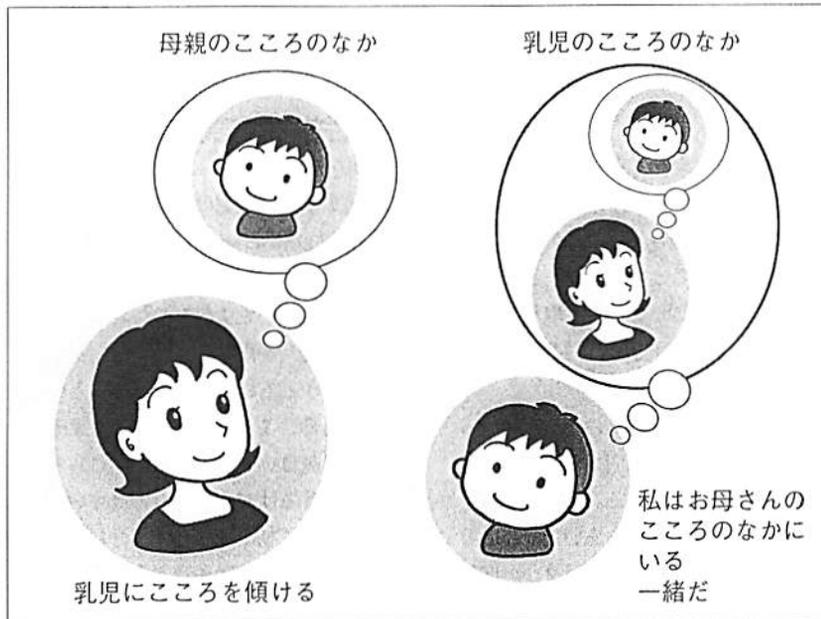


図1 母親のこころを通してみる子どものこころの世界

〈子ども-母親〉関係が変わる

このように筆者が母親との面接のなかで感じたことを取り上げたことをきっかけにして、母親は3人の子どもの関係について次々に急に思い出したように語るようになった。母親は子どもとの関係を内省的に振り返ることができたが、筆者にはずいぶんと母親の肩の力が抜けたように感じられた。

まもなく外に出ていたD男がセラピストと一緒に部屋に戻ってきた。すると一目散に母親のところを走っていき、首に強く抱きついたのである。筆者にはD男が心から甘えているのがひしひしと感ぜられたので、母親の気持ちを尋ねると、素直に「うれしい」と答えるのだった。しばらく母親の膝の上でじゃれていたが、満足したのかふたたびセラピストと遊び始めた。

母子の遊びのなかで気づいたこと

第2回：1週間後、筆者はそばで付き合いながら、しばらく母子二人で遊んでもらった。D男は小さなスポンジボールを2個手に持っていた。それを見て母親はすぐにそのボールとセットに

なっているゲートボール用のスティック(を模した玩具)を取り出し、D男に手渡して、使うようにと誘った。D男は戸惑っていたが、母親はなんとか使えるようにと手を携えて教えていた。するとD男はスティックを手に持って小さなトランポリンの下を覗きながら、まるでモップがけするようにしてそのスティックを出し入れし始めたのである。

その後、D男はプラスチック製のバットをみつめて振り始めたので、それを見て母親がボールを投げてやり、D男はバットで打ってはうまく当たるとうれしそうに反応していた。周囲の大人たちも拍手をし、雰囲気は盛り上がりを見せていた。けっこう楽しそうにしていたが、しだいに飽きてきたのであろうか、バットの持ち方が変わったのに筆者は気づいた。それはまるでバットが刀に変わったようにみえた。しかし、母親はそれに気づかず、なんとか打たせようと懸命に相手をし、D男がその気になるようにさかんに仕向けるのである。そこで筆者はそばにあったゲートボール用のスティックを手にとってちゃんばらごっこを始めた。するとD男はバットを刀にして応じ始めた。遊びにどんどん熱が入り、懸命になって切りつけ始めたので、筆者はおどけるようにして怖がって逃げた。するとD男は追いかけてまでちゃんばらごっこを続けるのだった。

〈母親-筆者〉関係と〈母親-子ども〉関係 一両者に共通して流れるもの

最初の面接で母親の語りのなかに筆者が感じとったことは、なぜか母親が先へ先へと急いで話し続けるために、筆者は口を挟むことさえできないほど圧倒される感じを抱き、母親との対話をもととする気持ちが萎えるように思えたことであった。このような〈母親-筆者〉関係のなかで感じられたことを筆者が取り上げたことが契機となって、母親は自分と3人の子どもとの関係を堰を切ったように語り始めている。

ここでとても興味深いのは、〈母親-筆者〉関係のなかで起こっていることが、〈母親-子ども〉関係のなかでも同様に起こっていることに、母親が気づいて語り始めたことである。その引き金となったのが筆者の指摘、つまりは母親と筆者とのあいだで起こっていることを取り上げたことであった。このことは、2つの関係には母親の対人的構えに共通性があることを示している。それは母親が他者に対して接する際に、なぜか相手の気持ちや意図を汲み取ることが容易ではないために、つい自分の思いでかかわろうとしてしまいやすいことである。しかし、幸いなことに筆者の取り上げた一言で母親はそのことに気づき、内省的な態度をとることができている。ここに母親の健康的な一面を垣間見ることができるのである。

母親の教条的な遊び方

しかし、2回目、母子で遊んでもらった際に、日頃の母子のかわり合いの特徴が浮かび上がっている。母親は子どもに懸命になって付き合っているのだが、どうしても母親は子どもの思いに合わせて行動することが難しく、つい自分の思いに突き動かされるようにして遊んでいる。そのことが子どもとの遊びの場面で浮かび上がっている。玩具を手にすると、バットならバット、ゲートボールのスティックならスティックというように、既成の枠(それらの玩具は一応それらしく作られているので、そのように遊ぶのが通常の扱い方ではあるが)に囚われてしまい、子どもの発想に柔軟に対応することが難しかったのである。筆者はこのことを前回の面接での内容と照らし合わせながら取り上げて、母親と一緒に考えていった。すると、次回から母子の遊びはしだいに柔軟なものへと変化し、二人の遊びは大いに盛り上がり、楽しいもの

へと変わっていった。すると日常生活場面でもD男は母親に甘えるようになっていったのである。

子どものころを映し出す鏡

泣いている乳児の相手をする際、養育者はなぜ泣いているのかを察知して「おなかですいたのね」「眠いのね」「オムツが濡れて気持ち悪いのね」などと言いつつ乳児の世話をし、乳児の不愉快な気持ちを心地よいものへと変えてやる。ここに育児や養育の基本的な構えが示されている。養育者が子どもの気持ちを感じとり、それを子どもに投げ返してやるという役割を担っている。まるで子どものころを映し出す鏡のような役割を果たしているのである。乳児はいま自分に何が起きているか、自らの力のみでそれを理解するすべを持ち合わせていない。このような他者のかかわりを通して初めて、いま自分に何が起きているかに気づくことができる。乳児は養育者のころを通して自分のころのありようを理解していくようになる(図1)。乳児にとって養育者は鏡のような役割を果たしているということが出来る。子どものころを育むためにはこうした他者とのかかわりが不可欠なのである。

子どものいまを生き生きと映し出す

鏡が本来の役割を果たすためには、いま子どもが何を感じているか、何をしようとしているか、子どもの生き生きとした姿を映し出すことが不可欠である。泣いている乳児を目の前にしたときに、なぜ泣いているかを養育者が肌で感じとって対応するということの大切さである。このように養育者(に限らずわれわれ)は通常、子どもを相手にした際に、いま目の前にいる子どもの姿を感じとっているものである。そうでなければ、子どもは自分の存在を養育者のころのなかに発見することができなくなってしまい、強い不安に襲われかねないのである。

養育者がころに抱く子ども像—現実的子ども像、想像的子ども像、理想的子ども像

しかし、養育者が子どもを相手にしているとき、いつもこのようにふだんの子どもの姿だけを思い浮かべて接しているのではない。子どもに対して養育者がころに浮かべる子ども像(内的表象)にはいくつかの次元がある。そのひとつはこれまで取り上げ

できた、いまの子どもの姿ともいえる現実的子ども像である。このような子ども像は誰の目からも明瞭に映り、養育者自身も意識化することができる。

「這えば立て、立てば歩めの親心」の成句に端的に示されているように、養育者は子どもの一日も早い(?)成長した姿を思い描きながら日々接している。このように養育者のここには子どものいまの姿を感じるとともに、子どもにこうあってほしい、こうなってほしいという願いが込められているものである。それが子どもにとっても養育者の期待に応えようとする意欲を駆り立て、成長を促進していく大きな力にもなっていく。養育者の期待が込められた想像的子ども像である。

しかし、そのような思いが商業主義的な早期教育の影響を受けたり、周囲の雑音に振り回されたりした借物の願いであったりすると、養育者はそれに強く縛られてしまい、いま目の前にいる子どもの姿を生き生きと感じることが困難になる。子どもの姿をアクチュアルに感じることができなくなってしまう。つまり、硬直化しやすい理想的子ども像である。

養育者が気づきにくい理想的子ども像

D男の母親が遊びのなかで玩具を手にして遊ぼうとした際に見せた姿は、まさにわが子をアクチュアルに感じることが難しかったがために起こったものである。そのため、D男は母親の瞳のなかに自分の姿を発見することができず、不安な気持ちに襲われていたのであろうと思われるのである。

子どもの成長を願う思いがなければ子育てという多大な労力を要する営みなど、継続できるものではなからうし、そうした思いは不可欠でもあるのだが、実際の生活場面で問題となりやすいのは、このような思いが他者から与えられた価値観に基づくようなものであればあるほど、いま目の前にいる子どものありのままの姿を感じとることを困難にするということである。

さらにやっかいなのは、当事者である養育者がそのことに気づきにくいことである。それゆえ臨床場面でそのことを取り上げて気づいてもらう必要があるのである。

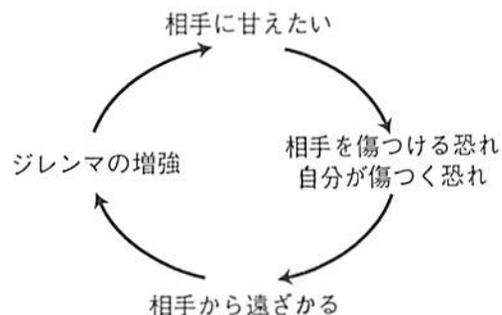


図2 甘えをめぐるアンビバレンス

〈母親-娘〉関係にみる負の循環

これまで主に〈母親-D男〉関係に焦点を当てて考えてきたが、第1回の面接で母親の口から語られているように、母親と娘の間にもデリケートな関係の問題があることがうかがわれるのを見落とすことはできない。娘は母親とのかわりを避けていることは誰の目にも明らかであるが、ここで大切なことは、〈母親-娘〉関係にもD男との関係と同質の問題が生じていることである。それは娘にみられる甘えをめぐるアンビバレンス(図2)である。

娘には母親に甘えたい気持ちがあるのだが、いざ母親を前にすると回避的になってしまい、母親がほかの用事で手が離せないような状況になって初めて宿題をおもむろにやろうとしているのである。このように正面きって母子が一緒にかかり合おうとすると回避的になり、母親がほかのことに気をとられていると、母親の期待に沿って動きだす。〈母親-娘〉関係にも先のD男との間と同じような負の循環が生まれ、悪循環がエスカレートしやすい状況が生まれていることに気づかされるのである。

以上述べてきたように、関係に視点を当ててみると、D男、娘、母親、筆者おのおのの相互の関係に同じような動きが起こっていることにあらためて気づかされるのである。したがって、われわれはおのおのの関係のなかでその動きを感じとりながら、そのなかで甘えをめぐる問題が潜んでいることに気づくことが大切なのである。そのことがおのおのの相互の関係に負の循環を生み、複雑な彩りを添えていることに気づき、負の循環を断つべく、いかにその関係に介入していくか、そのことを検討することが関係発達臨床においてもっとも大切になるのである。